



私立女子美術学校創始者横井玉子の夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(7)「横井家文書」所収の横井左平太書翰から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-07-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 堤, 克彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://joshibi.repo.nii.ac.jp/records/51.2

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



私立女子美術学校創始者横井玉子の 夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(7)

「横井家文書」所収の横井左平太書翰から

▶堤克彦

はじめに

このシリーズは熊本大学附属図書館寄託の「横井家文書」所収の横井左平太・大平書翰27通をもとに、その紹介を『女子美術大学紀要』第45号(2014年度)から始めた。第50号(2019年度)掲載の「研究報告」では、和暦と西暦の未整理から、最初慶応元(1865)年十二月九日と推定し、その後明治二(1869)年十二月九日に変更した書翰⑧A148 沼川三郎(横井大平の変名)書翰・宿元宛(母上・つせ・又雄、在長崎、十二月九日)を整理番号そのままで紹介した。

今回は「横井家文書」にはないが、沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』(近代日本史料選書14 山川出版社 1985年)所収の「横井左平太書翰」2通、追加①「津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰」(在米、和暦十二月二十日、八右衛門宛(在熊本)(391~393頁)と追加②「伊勢佐太郎書翰」(在米、西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日)、休也・八右衛門宛(在熊本)(393~398頁)を紹介しておきたい。

この「横井左平太書翰」2通は『元田永孚関係文書』所収のこともあり、多くの研究者がすでにこれらの書翰を活用しているが、横井左平太の深層心理についてまで踏み込んだ論文は皆無に近い。前者では滞米中の日本人留学生45人をリスト・アップし、後者では左平太が入学した「アナポリス海軍学校」の授業科目・寮生活規則・学校行事など、具体的なかつ克明に紹介している。

また滞米最古参の左平太は、諸藩からの欧米留学生を把握し、肥後藩からの渡米留学生の世話まで言及している。その一方で、洋学の修得には英語力が重要であり、左平太自身、語学力のなさで苦悩、その実体験から洋学は年少からの海外留学が必要かつ不可欠と訴えている。これら2通

の書翰は、横井玉子の夫左平太の滞米留学時の立場ばかりでなく、英語力不足による苦悩など、正直に吐露した好資料であるので、新たに追加したものである。

一、『元田永孚関係文書』所収の 「横井左平太書翰」(2通—追加①)

『元田永孚関係文書』では、つぎの書翰の日付を「明治(2)年12月20日」と記していた。おそらくこの書翰の後付の「十二月廿日」の発信年に自信がなかったからと思われる。そこで、まずこの年の確定を行なったので、その経緯について見ておきたい。

この発信年決定のヒントは、この書翰の「尚々」書きの「胆沢県へも御同様申し上げ置き候間、左様御承知下さるべく候」の「胆沢県」(「岩手県」の前身)にあった。周知の通り「胆沢県」は明治二(1869)年八月十二日から明治四(1871)年十一月二日の「一関県」の設置までの2年数カ月存続した県であった。その時期の県令は安場保和で、即ち安場保和への連絡を「胆沢県」と表現していた。この点により、この書翰の発信は「明治二〔1869〕年十二月二十日」であることを割り出した。

またこの「胆沢県」=「安場保和」ばかりでなく、この書翰に登場する「下津末彦」・「元田謙吉」も関係する。即ち「下津末彦」(まま、下津末喜〔1858~1930〕、下津休也の五男)は、後に安場保和の養子となった「安場末喜」であり、後に保和の長女トモを妻とする入り婿であった。

さらにこの書翰(原文)の写しには「右謙吉ノ上ニ付札 謙吉は元田八右衛門二男ニ而安場一平養子ニ而御座候。安場当時胆沢縣之少参事」との注記があり、また元田永孚著『還暦之記』には、安場保和の「我レニ二女アリテ、一男子無

○明治二(1869)年〔2通〕—左平太(26歳、在米)・大平(21歳、在長崎)		
挿入	追加①	津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰(在米、和暦十二月二十日)、八右衛門(元田永孚)宛(在熊本)
挿入	追加②	伊勢佐太郎書翰(在米、西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日)、休也(下津休也)・八右衛門(元田永孚)宛(在熊本)

シ、願クハ君ノ三男健吉（謙吉）ヲ賜フテ、我家ノ養子ト為ンコトヲ乞フ。君カ家門ノ我カ家ニ比較セサルヲ知ル、然トモ真ニ健吉君ノ人ト為リヲ愛慕ス。我レニ賜フコトヲ得ハ、其愛重決シテ君カ心ニ劣ラジト」の文言が紹介されている。

以上のことを前提に「津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰」から見ていきたい。なお（ ）は引用者註である。

○追加①「津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰」（在米、明治二〔1868〕年十二月二十日、八右衛門宛〔在熊本〕

【釈文】

自米国会城（主要都市の意か）新約克（ニューヨーク）、一翰拝呈仕候。嚴寒之候弥御安泰可被為渡奉恐悦候。次に私共（津田亀太郎・林玄助）儀、十月廿九日横浜出帆、船中格別之風波無御座候得共、冬節兎角海上不穩、漸十一月廿六日サンフランシスコ到着、同月廿九日同所出立、十二月六日当地（ニューブランズウィック）安着仕候間、御休意被成下候様、乍憚奉願候。

然ば当地滞学之諸士中、英国より転学候者も有之候程に而、惣躰学問之都合、大に宜敷御座候に付、兼而英国渡海之存念に候処、暫相見合、当国留学仕度、横井左平太（滞米留学中）にも相議、一兩年相留候儀に決定仕候間、左様御承知可被下候。

当地留学之面々は、佐土原世子島津政之進、其弟武之進、其臣橋口某、平山某、福井藩日下部太郎、鹿児島藩松村淳蔵、杉浦弘蔵、工藤十郎、永井五百介、大原礼之介、吉田彦磨、庄内藩高木三郎、仙台藩富田某（鉄之助）、博多藩平賀儀三郎、井上六三郎、本間英一郎、久留米藩山口正之介、静岡藩勝小鹿、山口藩児玉某、津川某、佐倉藩佐藤百太郎、長岡藩白峰駿馬、彦根藩武藤精一、鈴木某、英国にも諸藩より遊学致居候へ共、委敷承知仕不申、三条中御門友若卿、金沢藩五人姓名不詳、福井藩粕林之介、山口藩徳山侯子毛利平六郎并家来三人、毛利幾之進、鈴尾五郎并家来一人、石川小五郎、天野清三郎、河野義次郎、竹田庸次郎、普魯士（プロシア）国、山口藩青木周蔵、阿蘭陀（オランダ）国、同（山口藩）飯田太次郎、佐倉藩佐藤某等に而御座候。

佐土原之第三子島津敬三郎、当年十三歳、当時東京遊学に相成居候処、追々此地被来候由、世子之尊に御座候。如斯貴族、单身独歩洋行に相成候段、感激に堪兼、実に憤発（まゝ、奮発）勉励此秋奉存候。

固より百端之科業、一人之所能無御座、各其天稟（てんぴ

ん、生まれつきの才能）に随ひ、不致分科而は、成業目的無之候間、責而今兩三輩に而も、御国許より罷出候様有御座度、偏奉企望候。

抑洋学は関渉甚広、科目極多候へば、逆も幼年間より不取興申而は、記憶（憶）之力も弱り、旁真之成業可被難候間、皇国之人々と漢之書籍を以て、根本相固候儀は勿論に候へ共、其基本確立仕候は人々可存候間、何卒起業之機会不失様有之度、愚考仕候間、三人熟談之上、不差置左に言上仕候。

謙吉（まゝ、謙吉、元田八右衛門次男）様御事、往々御洋行に相成度との儀、兼而御養父様（安場保和）より何置候儀も有之候へば、御頼敷奉存居候に付、何卒御洋行有之度、頻に奉企望候。大抵一歳（一年間）之学費、先八百金（ドル）と見積り申候。下津末彦（まゝ、末喜）、沢村大助、其他御見込之人物は、一人にても罷出候様、御取斗被成下度奉願候。

今更改而申上迄も無御座候得共、本邦より海外之情実坐観遙察仕候とは大に致相違、出郷来只開耳目候事而已に而、聊嘗百聞不如一見之真味候様相覚申候間、返々も若年遊学之儀、御周旋被成下候様、千祈万禱此事に奉存候。

尤私共（津田亀太郎・林玄助）見聞之次第は、一々記載仕置候間、追々御覧にも可奉入候得共、着足下何分不任心底申、先は要用而已、荒増奉得貴意度、如斯御座候。余は奉期後信之時候。恐惶謹言

十二月廿日

津田亀太郎

林 玄助

横井左平太

八右衛門（元田永孚）様

尚々胆沢県（岩手県令安場保和）えも御同様申上置候間、左様御承知可被下候。万一私共愚見御同意被成下、謙吉様列弥御踏出に相決候はば、先東京迄被成御越度、左候へば滞学之同社も御座候間、御旅中之都合等、御世話可申上、当地御着之上は、乍不肖可添御心申上、此段も末筆に奉得貴意置候。以上

【解説】

この書翰は津田亀太郎（静一、樺溪、肥後実学連津田山三郎の子、国権党結成 1852～1909）と林玄助（正明、自由

民権運動家、九州改進黨結成 1848～1885)の渡米の経過から始まり、後半では滞米中の横井左平太に滞米留学を勧められた二人の見解が記されている。これが津田亀太郎・林玄助、そして最後に横井左平太を加えた三人の連名で送付された理由であろう。

①津田亀太郎・林玄助二人の米国安着の報告

この書翰は「当地」(ニューブランズウィック)に安着後の2週間目の「十二月二十日付」に、「米国会城(最大の主都の意か)新約克(ニューヨーク)」から発信されたもので、国許では「厳寒の候弥々御安泰」のことを「恐悦」(謹んで喜んで)云々の挨拶で始まる。

「私共」即ち津田亀太郎・林玄助の二人の渡米の経緯を、具体的に「私共儀、十月二十九日横浜出帆」し、約1ヶ月の太平洋横断航海の様子を「船中格別の風波」もなかったが、何しろ「冬節兎角海上不穏」(冬季の海上は穏やかならず)、漸く十一月二十六日に「サンフランシスコ到着」したこと、3日間の滞在した後の二十九日には同所を出立して、十二月六日に「当地」(ニューブランズウィック)に安着したので「御休意」(安心)してほしいと書く。

因みに都市の位置関係を見ると、あくまでも地図上の計測であるが、北から「ニューヨーク」—(30哩、48.3km)—「ニューブランズウィック」—(47哩、46.9km)—「アナポリス」—(20哩、32.2km)—「ワシントンDC」となっている。

後掲の追加②「伊勢佐太郎書翰」には、「ニューブランズウィック」は「新約克(ニューヨーク)より僅か三十里(30哩)相隔り、至極弁利なる地」との記述と一致する。「ニューヨーク—ニューブランズウィック—アナポリス—ワシントンDCの位置関係」は、女子美術大学研究紀要第49号(2019年3月)、本シリーズ(5)の掲載地図を参照されたい。

十二月六日に津田亀太郎・林玄助二人が「当地」(ニューブランズウィック)に安着した時、左平太はメリーランド州にある「アナポリス海軍学校」に入学・在学したばかりであった。追加②「伊勢佐太郎書翰書翰」によれば、「右二士、新約克(ニューヨーク)着車之時分は、折悪して、私には当学校の様に参り居候間、彼是不都合」と、直接迎えに行けなかったと記している。

しかし「ニューフロンズウィッキ」(ニューブランズウィック)には、「数多の日本生居候間、直に彼等同所迄出迎ひ、両士を「ニューフロンズウィッキ」之様に同道周旋仕候由」と聞いたと記している。

そして左平太は、「アナポリス海軍学校」で「佐土原世子(島津政之進)杯と一処(一緒)勉強相始め、私に於ても喜悦仕候。何卒成業有之度、夫のみ祈居申候」と記し、そんな「アナポリス海軍学校」に、到着したばかりの「林(玄助)・津田(亀太郎)兩人」が「先日不図当学校へ来訪之れ有り、久々振り我が故郷(肥後藩)の人に面会し、大に愉快を尽し、年来の旅情を慰め申し候」と記す。

②津田・林の「米国留学」決意

③A131「伊勢佐太郎履歴」(明治八〔1875〕年七月二日・海軍省宛)によれば、左平太が「アナポリス海軍学校」に入学する明治二(1869)年冬の時点で、「當時米国ニテ、日本生僅二九人」と記すが、追加②「伊勢佐太郎書翰」では「去ながら「ニューフロンズウィッキ」(ニューブランズウィック)には数多の日本生居候」と記している。

この「津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰」では、同年十二月二十日頃の「ニューブランズウィック」について、「当地」(ニューブランズウィック)で「滞学」する留学生の中には、「英国より転学」した者もいる程であり、「総体学問の都合、大に宜敷く」、即ち全体に学問するには最適・好都合の土地柄であると紹介、そして津田・林兩人も「兼ねて英国渡海の存念」であったが、「暫く相見合わせ」、「当国留学」(米国留学)をしたいと、横井左平太に相談、その結果、兩人は「一兩年」の「米国留学」を決定したので、そのように承知されたいと認めている。

③当地(ニューブランズウィック)の日本人留学事情

そして具体的に「ニューフロンズウィッキ」(ニューブランズウィック)に居る「数多の日本生」である24人の留学生の名前を書き上げ、同時に英・普・蘭の留学生21人を含め、都合45人名をリスト・アップしている。これらの人物に簡単な紹介を追加しておいた。

・当地24人 — 佐土原藩の世子(若殿)の島津政之進とその弟武之進、其の家臣の橋口某(宗儀)・平山某(太郎)、福井藩の日下部太郎(八木八十八)、鹿児島藩の松村淳蔵(本名市来勘十郎)・杉浦弘蔵(畠山文之助)・工藤十郎(湯地定基)・永井五百介(吉田清成)・大原礼之介(令之介、吉原重俊)・吉田彦磨(種子島敬助)、庄内藩の高木三郎(勝小鹿の随行者)、仙台藩の冨田某(鉄之助、勝小鹿の随行者)、博多(まま、福岡)藩の平賀儀三郎(義質〔よしすけ〕、藩随一の洋学者)・井上六三郎(良一、藩費でボ

ストン留学)・本間英一郎(岩吉、同左)、久留米藩の山口正之介(山口福康、ハーバード大学法学部入学)、静岡藩の勝小鹿(勝海舟の長男)、山口藩の児玉某(淳一郎)・津川某(良蔵)、佐倉藩の佐藤百太郎(順天堂二代目佐藤尚中〔たかなか〕の子、私費留学)、長岡藩の白峰駿馬(鶴殿豊之進)、彦根藩の武藤精一・鈴木某(貫一)

・英国18人 — 三条中御門友若卿、金沢藩の五人(姓名不詳)、福井藩の粕林之介、山口藩の徳山侯の子毛利平六郎並びに家来三人(姓名不詳)、毛利幾之進・鈴尾五郎(勝小鹿の随行者)並びに家来一人、石川小五郎(長州五人の一人、ユニヴァーシティ・カレッジ留学)、天野清三郎(渡辺蒿蔵〔こうぞう〕造船業)、河野義次郎、竹田庸次郎(長州五人の一人)

・普魯士(プロシア)1人 — 山口藩の青木周蔵(駐英大使・外務大臣、不平等条約改正交渉に関与)

・阿蘭陀(オランダ)2人 — 山口藩の飯田太次郎、佐倉藩の佐藤某(順天堂初代佐藤泰然の一族か)等

さらに佐土原藩の第三子島津敬三郎は当年十三歳で、当時東京遊学をしていたが、「追々」(そのうちに)「此の地」(ニューブランズウィック)に来るという。敬三郎は「世子の噂」即ち佐土原藩主継嗣と噂されていた人物と紹介している。

そしてこのように「貴族」(華族)が「单身独歩」の洋行(単身留学)を行なっているのは「感激」に堪えない。実に「憤発」(まま、奮発)・「勉励」の「秋」(とき)と記す。

この当地(ニューブランズウィック)の日本人留学生をはじめ、英・普・蘭の日本人留学生の名を正確に書けるのは、三人のうちでは左平太しかない。一体何故左平太は各藩の留学生の人名を列挙したのか。滞米最長の左平太の「日本生」把握と共に、根底には肥後藩の非常に遅れた留学生政策への遅れを懸念し、少しでも他藩を見習ってほしいとの思いがあったのかもしれない。

④幼年からの「洋学」修得

ついで左平太の滞米留学生としての体験に依拠した「洋学」修得法を展開している。固より「百端の科業」(万端の課業)は、一人の「所能」(一人の力でできるもの)ではなく、各人の持つ「天稟」(てんぴん、生まれつきの才能)に随って「分科」しなければ、「成業目的」(学業や事業の目的)は達成できないので、せめて今両・三人の輩でも、肥後藩からアメリカ留学を考えてもらいたいと、偏に「企望」(あることを企て、その達成を望む)している。

抑「洋学」は「関渉」(関わり携わること)が甚だ広く、科目は極めて多くあるので、「逆も幼年間より取り興し」しなければ、「記憶(憶)の力も弱り」、「真の成業難かるべく」と、幼年からの「洋学」開始にこそ非常に重要であると指摘・強調している。

⑤津田亀太郎・林玄助・横井左平太が「熟談」した三人の候補

「皇国」(日本国)の人々は「和漢の書籍」により「根本相固り」(学問の基礎)は勿論、その「基本確立」(基礎学力)が出来ている人々がいるので、何卒「起業の機会」(洋学修得のチャンス)を失わない様にあってほしいと思い、左平太は津田亀太郎・林玄助と三人で「愚考」(自分たちの考え)を回らし、「熟談」の上「差し置かず」(直ちに)「左」(つぎのよう)に言上することにしたと記す。

一人目は「謙吉」(まま、健吉、元田八右衛門〔永孚〕の子)であった。「謙吉」は「往々」(以前から)「洋行」(留学)したいと、兼ねて「養父」(安場保和)から聞いていたこともあって「頼もしく」思っていた。何卒「洋行」されるように「頻りに企望」している。「大抵」(大体)一歳(一年間)の学費は、先ず「八百金」(800ドルか)が必要と見積っている。

二人目は「下津末彦」(まま、下津末喜〔1858～1930〕か、下津休也の五男、安場保和養子安場末喜、妻は保和長女トモ)で、三人目は「沢村大助」(沢村尉左衛門の息子か)を名指し、その他にも「見込の人物」(留学該当者)がいれば、一人でもよいから留学される様に「取り計らい」されることを願っている。この思いが最も強かったのは、当然ながら滞米中の左平太であった。

⑥「若年遊学」の周旋依頼

今更改めて申す上げる迄もないことであるが、海外遊学(留学)は「本邦」(日本国)より海外の情実を「座観」(ただ見ているだけ)・「遥察」(ただ思い巡らすだけ)とは「大に相違」(大違い)である。「出郷来」は(渡米留学すれば)、只だ「耳目を開き」(見聞した)事でも、聊か嘗ての「百聞は一見に如かず」の「真味」(本当の意味)を理解でき、返す返すも「若年遊学」のことは周旋される様「千祈万禱」している。最後に津田亀太郎・林玄助がつぎのように記している。

尤も私共の見聞の次第は、一々記載して置くので、追々御覧いただきたい。「着足下」(到着したばかりで)

何分「心底」(真意)に任せず、先ずは要用のみを荒増(あらまし)認め、貴意を得たいと思っている。余りは後信で期したい。 恐惶謹言

そして「尚々」(追伸)では、「胆沢県」(岩手県令安場保和)へも同様の内容を申し上げて置いたので、そのように承知してもらいたい。わざわざ岩手県令安場保和にも書翰を送っているのは、前述したように安場の養子となっていた「元田謙吉」と「下津末彦」(下津末喜、後の安場末喜)の洋行勧誘と兩人の説得もあつてのことであろう。

さらに、左平太は万一私共の愚見に同意され、謙吉氏が洋行を決意したならば、先ず東京まで出向いてほしい。そうすれば「滞学の同社」(留学幹旋組織)もあるので、留学に必要なかつ好都合な全般的な世話もしてくれる。「当地」(ニューブランズウィック)に到着されたならば、「不肖」ながら、自分たちが心添え(サポート)をする所存である。此の段も「末筆」に記し、貴意を得ておきたいと締め括っている。

二、『元田永孚関係文書』所収の「横井左平太書翰」(2通—追加②)

この書翰は数々の疑問を内包していた。この書翰の正確な解説には一種の「謎解き」が不可欠であった。書翰後付の「西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日」の日付である。西暦と和暦にかなりの年差があった。検討の経緯は後掲の表に譲るが、結果として「西洋一八七〇年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日」と訂正した。

この書翰では、伊勢佐太郎(左平太)の変名で、「海軍所」(アナポリス海軍学校)の厳しい校内規則や10学課の内容、校内行事、また米国留学の勧めやこれからの留学への提案などについて書き送っている。

○追加②「伊勢佐太郎書翰」(在米、西洋一八七一〔まゝ、一八七〇〕年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日)、休也・八右衛門宛(在熊本)

【釈文】

合衆国アナポリス海軍学校より、謹て一書奉拝呈候。時下嚴寒之候に御座候処、各様御揃益御安泰に可被為御渡光、恐悦不斜奉遥賀候。次に私儀無異消光勉学罷在候間、

乍憚御放念可被成下候。

先以洋行以来は意外之御無音申上、絶て書中の御左右も不相伺、実失敬恐怖不少次第に奉存候。然らば、先便林(玄助、正明)・津田(亀太郎、静一)兩人当国着に相成、先日不図当学校え来訪有之、久々振我が故郷之人に面会し、大に愈(まゝ、愉)快を尽し、年来の旅情を慰め申候。

扱近来は絶て社中之音信も無御座、方今は御地如何の形勢に相運び候かと、日夜遥察罷在候処、右兩士より伝聞仕候に、当春以来は、又々攘夷固陋之徒、盛に蜂起し、大に姦計を企て、士君子の志を妨げ、当春諸侯東京に会合して、皇国之基礎を確定するの趣意も全く不行、再び旧来因循之姿に帰し候由、実に慨嘆之至奉存候。

昨春政權朝に帰するの後は、日本全国の人才も登用せられ、此節は始めて皇国挽回の時運到来し、古来万民塗炭の苦難を免れ、西洋各国に並立の御政体にも到るかと、遙々奉希望候処、方今又々六ヶ敷き形態に相成、とても今日太政官の御運びにては、皇国再び治平に帰し、万民安堵の地に至り候事は、乍恐奉懸念候。

去りながら何卒此上は、士君子の尽力を以て、皇国再び挽回の道に趣き候様、遙々心願切祈罷在次第に御座候。

一、私共にも、去る西洋一千八百六十九年第十月初め、外国官知事伊達中納言(宗城、在任期間 明治元年閏四月二十一日～二年五月二十九日<六月二日?>)殿より米国公使え、日本に於て御問合せの趣、并私共に御達し之御書附等、同時に華盛頓政府に相達し申候。尤も私共え参り候御書附、直にワシントン政府より差廻し候間、早速越藩日下部太郎・私兩人、華盛頓政府え罷越、外国官并海軍惣督え面会致し、海軍所入学の義を談判仕候処、彼等曰、最早今年は海軍所相始り居候事に而、米国の人には決して免許すること相成らず候得共、私共には、日本政府より御頼みの事、慥に米国公使より申来候事故、何時にても入学差支ず、免許致すべくとて、直に水軍大惣督より免許状を与え申候。

尤海軍所惣裁之方えも、同断の免状を遣し申候。依之、薩生松村淳蔵・私儀は早速去る十二月六日より、海軍所え入学致し申候。右海軍学校之様子、左に荒増言上仕候。

一、海軍惣裁第一「コムモドル」〔官名〕、第二惣裁甲必丹(カピタン)。彼等至て深切にて、私共儀は日本政府より送られしと云訳を以て、余の諸生よりは格別厚き取り扱にて御坐候。

彼云、何にても彼等及丈けは助力すべき候間、必ず遠

慮なく告べし。海軍生に於ても同断、別して深切に有之、私共學術に於て六ヶ敷事有之候得ば、何にても尋問すべし、悦んで助力すべしと云。如此次第にて、私共に於ては、大幸の至に御坐候。右第二の惣裁は、先年「ヘルリ」初めて日本え來舶の時、船將にて来る人なり。

一、海軍所學課十に分つ。

第一、海軍 海上砲術・陸上大砲運用・航海術・陸兵訓練

第二、数学 数学・代数・三角術・測量術

第三、器械學

第四、天文学及地理學

第五、窮理學（物理学か）及分理學（化学か）

第六、仏學（仏蘭西、フランス）

第七、スパンヤ學（スパンヤ＝スペイン・イスパニア）

第八、鑛石學（鉱物学か）

第九、図引學（製図学か）

第十、築城學（陣地構築学か）

右海軍訓練且つ運用等稽古の爲め、軍艦六艘、此學校に属す。

右一科毎に一人宛大教授あり。助教、此の人数は其科によりて異同あり。助教の人数書生を教導するに、一七日毎に其大教授に書生學問の甲乙を告ぐ。當時海軍生二百五十三人、右書生を四等に別（わか）つ。第一等六十七人、第二等五十六人、第三等三十八人、第四等九十二人。

右第一等の書生の内より一人、「ルーテナント」〔海軍士官ヲ云〕一人毎日交代を以て、書生の事に関係す。此兩人の詰所は、書生部屋の脇にあり。同第四等の書生より三人ずつ交代を以、書生部屋を守る。

一、朝六字大砲をうち、此の砲声にて、書生床を離れ。直に寢床を作り、掃除をなし、七字に太鼓を鳴らし、書生皆學校の前に並び立つ。右書生の事に関係する、第一等の書生一人・ルーテナント一人来て、此の日の學課を云渡す。

夫より食事に至る。終て各部屋に帰る。八字より十二字迄で伝習の時なり。一字の太鼓に、又食事をなす。又二字より四字までの間は、伝習の時なり。夫より五字までの間は、運用大砲等の訓練あり、五字に又太鼓をならして、何も食事に至る。夫より七字までの間は休息す。又七字半より九字半までの間は、勉學の時なり。同時に又大砲をならし、此の砲声にて書生勉學を止む。十字に「ルーテナント」一人来て灯を消す。直に就床。

右海軍生には、二人に一つの部屋を与へ、勉學の時は決て互に部屋え行くことを不許、若し無抛して出る時は、書生部屋の入口を守衛する海軍生に免許を得て出る。彼の「ルーテナント」一人・第一等の諸（まゝ、書）生一人、勉學の時は書生の部屋を廻る。若し怠るものあらば、夕五字より六字まで、訓練場に於て小銃を持たしむ。

海軍生等、海軍校より決して外出することを不免。若無抛用事あつて、門外え出る時は、第二の惣裁に至り、何時より何時まで外出し度しとの免許を請ふ。夫より又書生の事に関する「ルーテナント」に、右の趣を告げ、漸く出ることを得る。海軍生は煙草を用ひ、或は酒を呑むことを、別して制禁す。

若し過（あやまり）て此法を破る者は、直に學校を追出す。書生四年にして學校の免許を得る。四年の間に第二等の書生、二年めに三十日、家に帰ることを免ず。

毎年西曆第十月第一日より、海軍學校開業、五月廿日まで。夫より六月初め軍艦に乗して、歐羅巴諸州に航海す。英仏の海軍校に至る。第九月下旬に再び學校に歸す。其間航海の現実教しむ。

實に海軍學校の廣大にして、且つ全備したることは、驚愕する次第に御座候。然し此校、中々規則嚴重にして、別して外国人に於ては、余程の難事に御座候。私共入学以來、漸く二ヶ月斗に相成、未だ學校之規則も十分覚へ不申、唯毎日々々規則に縛られ、日月を送居申候。

○去る十二月廿五日は耶蘇生日にて、西洋各国大吉日と唱へ、万民大に樂を尽す日なり。此學校も同断にて、廿五日の夜は「ルーテナント」及書生等、異風に出て立ち、劍舞台に於て躍を成す。其形容、古へ歐羅巴にて「ナイト」と云人物の姿に成る者もあり、又は「ペルシャ」「トルコ」「スコットランド」「印度」「支那」人と成る。古今万国の真似をなし、全く四海中の人が集合せし有様を成せり。

其の外十三四より十八九までの少女百人余、是も同様甚だ美なる粧にて、其の着物は天の羽衣と云べきものを着せり。其美麗なることは、實に目を驚し申候。所謂古へ武礼講（ママ、無礼講）と云物も、如此かと思れたり。

右男女、初めは皆仮面をかぶり、樂を奏して、一処（まゝ、一緒）に踊を成す。凡二字斗にて、各仮面を取る。其始て何某なることを知る。此の夜各曉まで、如此して樂を尽せり。

尤も此の夜は「コムモトル」（官名）、甲必丹（カピタン、キャプテン）、其外皆な爰に集る。水師提督杯も、「ワシントン」より見物の爲め來れり。如此奇なる樂みは、洋行せしよ

り初て見申候。如此男女集合して、共に樂を尽すと雖も、風俗実に正しく、所謂樂んで不淫也。

○津田・林両士にも、全体御地出立之時分は、英行(英国留学)の存念に御座候由。然る処当国着之上、段々爰の地学校等之事情実見にては、当国に而留学致度との相談御座候間、私に於て至極同意仕候。

未だ両士共格別英語も相分り不申候間、是より遙々英国の様に渡海有之候よりも、寧当国に而暫時留学の方、可然かと愚考仕候。尤薩生杯に初最(ママ、最初)は、「ロンドン」(ロンドン)に而相成居候処、当時は何連(いづれ)も当地の様に転学に相成候。入費も英国よりは当国の方、勘弁と申事に御座候。

右二士、新約克(ニューヨーク)着車之時分は、折悪して、私には当学校の様に参り居候間、彼是不都合にて御座候。去ながら「ニューフロンスウィッキ」(ニューブランズウィック)には、数多の日本生居候間、直に彼等同所迄出迎ひ、両士を「ニューフロンスウィッキ」之様に同道周旋仕候由。当時同所の学校に於て、佐土原世子(島津政之進)杯と一処(一緒)勉強相始め、私に於ても喜悅仕候。何卒成業有之度、夫のみ祈居申候。

「ニューフロンスウィッキ」は私先の場所にて、学校先生杯も大ニ人物好く、頻りと日本生を誘申候。新約克(ニューヨーク)より僅か三十里(30哩、48.3km)相隔り、至極弁利なる地にて御座候。

○林列より承り候に、御息様方(下津休也の五男末彦〔まま、末喜か、安場保和の養子とり、下津末喜・安場末喜〕と元田八右衛門の子謙吉〔まま、健吉 1857. 12月2日生まれ〕)にも、追々御洋行の御存念の由、誠以感銘の至に奉存候。何卒御渡海被為在候様、私に於ても祈願仕候。

然るに私洋行の一条を愚考仕候に、全体我国四五年前より洋行相開け候後は、諸藩より欧羅巴及当国え渡海候者、殆ど百余人にも相成候得共、未だ一人も成業して帰朝する者なく、唯無止〔ムヤミ〕に洋地を奔走し、莫大の入費を成すのみに而、目的の学業を成さずして、多く国に帰り、誠に残念の至に御座候。

必(まま、畢)竟は我が国の人、未だ洋地の事情にうとく、唯だ誰に而も、西洋にさへ渡海致候得ば、速に学業成就する者と相考候より、如此無益の洋行に相成候。

第一私、衆に先じ洋行をなし、殊に此の海軍校に入り候得共、最早我が晩学不才に而は、とても充分西洋技芸之学科を、学びなすこと不能、尤も海軍の事情は、聊か積年来

の志願に而御座候間、不能不及ながらも、日夜苦心罷在候へ共、私に於ては少しく難事に御座候。

とても西洋の技術を学び候には、幼年の人ならずしては行れ不申候。何卒此の上は、我壮年の俊才に代り度相考居申候。御国よりも幼年の人物を御選り御出し被成候様、何分御周旋被下度、謹で奉懇願候。

先年以來日本より渡海致候人、多くは二十歳以上の人に而、進歩すること甚だ遅し。たま々々学校に入り、英語を学候ても、直に慷慨(愁嘆)の心を起し、学校の規則にも不従、遙々遠洋を渡来、如此三尺の童子と共に、国語杯を学び候ては、何れの日あつて、学業を成し、国家に報恩の時来ならんと考へ、言語も不叶して、或は海陸軍の学校に入ん事を望み、或は政事の学課を学んとして、終に首尾貫徹すること不能、洋人の笑を受けること又不些少〔すくなからず〕、とても我慷慨激烈の士にては、西洋の学問をなすことは六ヶ敷、御一笑可被成下候。

若し洋行生御出し被成候節は、十五六才にして文才ある、至て静なる性質の人物を、御選り御出被成候得ば、後日国家之御用に相立可申奉存候。尤当地海軍の学校などは、十四より十八までの内なくては入れ不申候。

○方今西洋諸州は至て無異、只「スペイン」(スペイン)之一国、先年来の内乱にて、今に治り不申、其他は先静謐、別して当「アメリカ」は平和に相成、尤當時の大統領(グラント18代米大統領、在職1869~1877年)には、国民も大に服し、益盛大に趣き候。

実に西洋諸州、器械の術を發明し、弁利を極むることは、日新之勢にて、富国強兵の一途に至ては、更に敬服する次第に御座候。恐くは聖人再び起ると雖、間然するなけん。

然し風俗に於ては、又々大に悪くむべきの風習も候得共、方今の我国体に比し候得ば、至極の治平、万民も安じ、富国強兵相整ひ、一事にして不及、実に洋人に対し、恥ずべきの至に奉存候。

何卒我国の貴族等も、井蛙の小見識を見破り、海外え乗出し、洋地の事情を実見有度、是又希望罷在候。西洋如此盛大に至と雖も、所謂法律の学道にて、心術上の一途に於ては大に暗く、唯道之一事に帰せざるを慨嘆仕候。

色々得尊慮度儀は、山岳御座候へ共、何分前文之通り、当学校に入り候には、規則に縛せられ、更に学問を得不申、先づは御安否御伺申上度く、奉呈寸楮(自分の手紙の謙讓語)候。余は在後音。恐惶頓首

「伊勢佐太郎書翰」	「西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日」	
西暦 → 和暦	西洋一八七一年第一月二十三日	明治三（1870）年十二月二日
西暦 ← 和暦	西洋一八七〇年第一月二十五日	我明治二（1869）年十二月二十三日
明治二（1869）年十二月九日付、沼川三郎（大平）書翰	「来年五月（一八七〇〔明治三〕年五月）より弥よ御入校」（アナポリス海軍学校入校）云々は二甥左平太・大平の勘違い。実際の開業期間（授業・座学）は、西暦十月一日より翌年五月二十日までであり、六月初めから九月下旬まで「軍艦」に乗って「欧羅巴」（ヨーロッパ）諸州まで航海を実施（軍艦実習）	
伊勢佐太郎（左平太）の「アナポリス海軍学校」の入学許可	明治二（1869）年十二月六日	
「伊勢佐太郎書翰」休也・八右衛門宛（在熊本）、「アナポリス海軍学校」在学	「去る西洋一千八百六十九年第十月初め、外国官知事伊達中納言（宗城、在任期間 明治元年閏四月二十一日～二年五月二十九日＜六月二日？＞）殿より米国公使え」依頼 西洋一八七一年第一月二十三日、「入学して漸く二ヶ月程」→一八七〇年十一月二十三日は「アナポリス海軍学校」入学一年後に当たる	我明治二（1869）年十二月二十三日、「入学して漸く二ヶ月程」→明治二（1869）年十月二十三日
「伊勢佐太郎履歴」	明治二（1869）年ノ冬、伊達宗城の依頼で、明治二（1869）年十二月初め（十二月六日）入学	外務卿「ハミルトンフィーン」は2ヶ月以上遅れた十二月六日の「アナポリス海軍学校」入学を「日本人への特別許可」としながらも、十月一日からの入学とした→「漸く二ヶ月程」の理由
「伊勢佐太郎履歴」	明治四（1871）年の冬に帰国。入学後「凡十八ヶ月程」の起点は、明治二（1869）年十月一日からで、明治四（1871）年四月までである	明治二（1869）年十二月六日後の「星学（天文学の旧称）相学び、凡十八ヶ月程」は明治四（1871）年四月に当る
「横井左平太渡米中の費用（ドル）報告」	明治四（1871）年十月九日、帰朝の命、紐育（ニューヨーク）出発、十一月十九日、帰朝	
以上の考察の結果	「西洋一八七一年第一月二十三日」は誤り→「西洋一八七〇年第一月二十五日」	「我明治二（1869）年十二月二十三日」の方が正しい

西洋一千八百七十一年第一月二十三日

我 明治二年十二月二十三日

伊勢佐太郎

休也（下津休也）様

八右衛門（元田永孚）様 御左右（御許にの意か）

二白 乍恐時下折角御自養御専一に奉祈願候。早卒相認め乱筆之段、幾重にも御断申上候。何卒御推覧被成下度、伏奉願上候。再拝

【解説】

①「伊勢佐太郎書翰」の後付け月日について

この『元田永孚関係文書』の追加②「伊勢佐太郎書翰」の首に付された日付は「明治2年12月22日」となっているが、この日付はあきらかに編集者の誤記であろう。

またこの書翰の後付には「西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日」と西暦と和暦が併記されている。この書翰は活字化されているが、この書翰の解説者が墨字の「西洋一八七〇年」を「西洋一八七一年」と読み違えたとは考えられない。そこで上の表を作成し、その考察を

試みた。

これによると、「西洋一八七一年第一月二十三日」は「我明治二年十二月二十三日」ではなく「明治三年十二月二日」に当たり、逆に「我明治二年十二月二十三日」は、正しくは「西洋一八七〇年第一月二十五日」で二日程の違いであった。一体何故佐太郎（左平太）が西洋暦への換算を間違えたのか。それは後述するような理由ではないかと推測している。

②「合衆国アナポリス海軍学校より、謹んで一書拝呈奉り候」の背景

この書翰の冒頭の「合衆国アナポリス海軍学校より、謹んで一書拝呈奉り候」の一文は、伊勢佐太郎（左平太）が念願の「アナポリス海軍学校」にすでに入学・在学していることを示すが、この一文は何かしら一種の誇らしさが感じられる。

この書翰の後半に出て来る「漸く二ヶ月程」は、西暦一八六九年十二月六日の「アナポリス海軍学校」入学許可から「漸く二ヶ月程」の意で、「西洋一八七〇年第一月二十三日（正しくは二十五）日、明治二年十二月二十三日」は、佐太郎（左平太）がこの書翰を認めた日であった。この時系列からも「西洋一八七〇年第一月二十三〔二十五〕日、明治二年

十二月二十三日」の方が正しい。前表には時系列的な考察のために数例をあげておいた。

さて伊勢佐太郎（左平太）の前記の「合衆国アナポリス海軍学校より、謹んで一書拝呈奉り候」の一文の気持ちを理解するために、「アナポリス海軍学校」入学前の経緯を知っておく必要がある。

この1年4か月前の明治元（1868）年の㊹A136「伊勢佐太郎・沼川三郎連名書翰」（在米、十月七日、和暦八月二十三日、崎陽諸賢兄宛〔在長崎〕・横井小楠〔在京都〕）に、「アナポリス海軍学校」への入学が可能かどうか、その不安な気持ちをつぎのように書き綴っていた。

先便ニ如云、西洋之学校ハ不時入校スル事一切不相成、海軍所（アナポリス海軍学校）之方ハ、尤嚴重ニ而、若来六月（1869年6月〔明治二年五月〕）入込出来兼候得ハ、亦一年空シク相待チ不申而ハ、入校六ヶ數御座候。

何卒御地之御左右、来早春までニ承り度、相待居申候。既ニ小生共ニも、當八月よりハ、爰元大学校（ラトガースカレッジ）之方入校之積ニ而在之、其前御国許再願之成否承り度、旧冬（慶応三〔1867〕年の冬）以来得貴意置候得共、終ニ御返事不来、當年（明治元〔1868〕年）も又機會失せり。

當時ハ小生共ニも、来夏（1869年6月〔明治二年五月〕）海軍所（アナポリス海軍学校）入校丈ケ之用意、日夜勉強罷在候。（後略）

この書翰によると、伊勢佐太郎（左平太）は明治元（1868）年段階で「爰元大学校」（ラトガースカレッジ）入学の機会を逸し、「来夏（1869年6月〔明治二年五月〕）」の「海軍所（アナポリス海軍学校）入校丈ケ之用意」のため、数カ月間「日夜勉強」（猛勉強）すると、その決意を宣言していた。

しかし実際「アナポリス海軍学校」に入学できたのには、後述するように別の日米間の交渉による政治的要因が大きく関わっていた。当時の左平太・太平は、そんなことに期待しても実現するかどうか判らなかつたが、結果として、左平太の「アナポリス海軍学校」への入学は日米間の外交交渉によって、実現し可能となった。

前述したように、「合衆国アナポリス海軍学校より、謹んで一書拝呈奉り候」の一文には、「アナポリス海軍学校」に入学できた喜びの響きさえも感じられる。前号で紹介した

宿許への「横井大平書翰」によれば、佐太郎（左平太）は明治二（1869）年十二月六日に「アナポリス海軍学校」への入学許可が受理されていた。

そうすると、この「西洋一八七〇年第一月二十三日」（明治二年十二月二十三日）は、入学してからまだ「漸く二ヶ月程」（実際の在学は17日間であるが、正式の開業は西暦十月一日からであった）しか経っていない。当然ながら、左平太には「アナポリス海軍学校」に正式に在学しているという実感もまだわかないながらも、その喜びと誇らしさを隠しきれず、まさにほとぼしる心境にあったのであろう。

前掲の「西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日」の後付の年月日などは、滞米中の左平太が「西暦一八七〇年」を「西洋一八七一年」に間違える筈はないのに間違えている。聡明な左平太らしくないことである。

おそらくその原因の一つには、日本から密航渡米した最大の目的は「アナポリス海軍学校」への入学であつたし、そのたつての念願が現実のものとなつたばかりで、まさに夢のような状況に左平太自身が心底動転していたのかもしれない。

③同郷人林玄助・津田亀太郎の「アナポリス海軍学校」来訪

伊勢佐太郎（左平太）は下津休也や元田八右衛門の無事を賀し、自らも「アナポリス海軍学校」で勉強に励んでいることを報じている。二人には慶応二（1866）年の密航渡米以来、「意外の御無音」を詫び、「失敬恐怖少なからざる次第」と重ねて詫びている。

ついで先便（前の船便）で林（玄助、正明）・津田（亀太郎、静一）が渡米直後に、入学して間なしの左平太を「先日不図当学校（「アナポリス海軍学校」）へ来訪」してきた。「久々振り我が故郷の人に面会」できて、大に愉快を尽し、「年来の旅情」（日本を離れて数年以来の滞米中の労苦）を慰めることができたこと記すが、その態度や文言には佐太郎（左平太）の余裕みtainなものが感じられる。

④日本国の政治的不安定を懸念

最近長崎からの「社中（熊本社中）の音信」も全くないので、いま日本国が「如何の形勢に相運び候か」、全くわからず「日夜遥察」していた。林・津田兩人からの伝聞（聞いたところ）によれば、「当春（明治二年の春）以来は、又々「攘夷固陋の徒」（古勤王派）が「盛んに蜂起し、大に姦計を企て」、「士君子（明治政府の開明的指導者）の志」を妨げ、当

春には諸侯らが東京に会合して、「皇国の基礎」(日本国の基礎)を確定する「趣意」(目的実現)も全く行われず、再び「旧来因循の姿」(旧態依然)に帰し候由、実に慨嘆の至り」であって、残念至極と記す。

おそらく明治新政府内での「太政官」の開明的な施策に、守旧派で占める「神祇官」の所謂「古勤王派」の勢力が侮れない程になっていることをさすのであろう。その「古勤王派」と十津川郷土らの陰謀で、明治二年一月五日の「小楠暗殺」事件を引き起こしていた。時系列的には佐太郎(左平太)・三郎(大平)が叔父小楠の暗殺の経緯について、林・津田兩人から詳細に聞き知っている可能性があるが、この書翰では一言も触れられていない。

さらに佐太郎(左平太)の意見は続く。昨春(慶応四・明治元〔1868〕年一月)に政権が朝廷に帰した後は、日本全国の人材(人材)も登用せられた。此の節は初めて「皇国挽回」の時運が到来し、これで「古来万民塗炭の苦難」が免れ、やっと西洋各国に「並立の御政体」(肩を並べられる対等な政治体制)に到るかと、遙々(アメリカから)希望していたが、現在さらに「六ヶ敷き(難しき)形態」になっているようで、とても今日の「太政官の御運び」(太政官の施策だけ)では、皇国が再び「治平」(太平)に帰し、「万民安堵の地」に至る事は難しいのではないかと懸念している。そうであるけれども、どうか「士君子の尽力」によって、「皇国再び挽回の道」が進むように、遙々「心願切祈」「(心より願い切に祈ること)する次第とも記している。

⑤佐太郎(左平太)らが「アナポリス海軍学校」入学できた理由

叔父小楠は「淋疾」が重篤化し、一時「土中の者」と覚悟したほどであったが、奇跡的に恢復した。その直後の明治元(1868)年九月十五日付の「小楠書翰」213「左平太・大平へ」には、「アナポリス海軍学校」入学のことについて認めていた。その一部を「読み下し文」にして引用・紹介しておきたい。

先々相替らず無事修行の段大慶いたし候。海軍所(アナポリス海軍学校)入校の存念にて、ワシントン府惣督掛け合い、存念(思っていた)通り六人は此許太政官より頼み越し候へば、苦しからざる段(全員入学決定)に相決し、入費等迄細々の申し越し至極千万、さぞさぞ心配致され候事に存じ候。当時拙者参与(参与職)

に居り候事故、早々申し談じ(早々と申し入れ)、いか様とぞ存念通り(二甥の希望通り)に落着(決着)いたす様に心配り致すべく候。

熊本の成り行き、江口(純三郎・高廉、徳富一敬の二弟)別紙の通りにて、来春よりの御助力必ず六ヶ敷く之れ有るべく(肥後藩からの藩費支援は困難)存じ候間、幸い拙者当時の通り相勤め居り候へば、過分の月給拝領いたし事故、来春よりの学料(留学費用)は手許より遣わし候筈にて、先ず洋銀三百ドル替え(為替)にて此の節さし廻し候手数いたし居り候処にて之れ有り候。(以下略)

当時参与であった小楠が、早々から二甥左平太・大平を含む六人の「アナポリス海軍学校」入学許可願いの手続きを、明治政府に依頼していたことが明記されている。さらに小楠は「学料」に参与職の「月給」の一部を当てることも明言していた。

その小楠は明治二(1869)年一月五日に暗殺されたが、小楠の存念はそのまま明治政府に受け継がれ、この書翰の「私共」(左平太・大平)にも、一八六九(明治二)年十一月初め、外国官知事の伊達中納言(伊達宗城)から米国公使への日本側の問合せの趣と私共(左平太・大平)への達しの御書付などが、同時に華盛頓(ワシントン)政府に達したのであった。

尤も私共への書付は、直ちにワシントン政府より差し廻しになったので、早速越藩日下部太郎(八木八十八)と私(左平太)兩人は、華盛頓(ワシントン)政府へ出向き、外国官や海軍惣督に面会することができ、「海軍所」(「海軍学校」即ち「アナポリス海軍〔兵〕学校」と同じ)入学の件も談判することができた。

彼等が言うには「最早今年は海軍所(アナポリス海軍学校)相始まり居り候事にて、米国の人には決して免許すること相成らず候得共、私共には日本政府より御頼みの事、慥(たしか)に米国公使より申し来り候事故、何時にても入学差し支えず、免許致すべくとて、直ちに水軍(海軍)大惣督より免許状(入学許可証)を与え」たとのことであった。

「尤も海軍所(アナポリス海軍学校)惣裁の方へも、同断の免状を遣していたので、薩生の松村淳蔵(薩摩藩第二次米国留学生で、米国海軍士官学校アナポリスの日本人留学生卒業第一号)と私(左平太)儀は、早速去る十二月六日より、海軍所(アナポリス海軍学校)へ入学することができた」と記していた。

その経緯に関する記述を、後掲の㉓ A131「伊勢佐太郎履歴」(明治八〔1875〕年七月二日・海軍省宛)の中から、より詳しく具体的な経緯の一分を引用して紹介しておきたい。

其後明治二巳(1869年)ノ冬(米国の冬は太陽暦の12月・翌年1・2月)、改メテ外国省知事伊達中納言(伊達宗城)殿ヨリ、米国政府え御頼越シニ相成、當時米国ニテ、日本生僅ニ九人ニテ、右之内ヨリ都合次第「アナポリス」(アナポリス海軍学校)入校可仕旨、御達有之候ニ付キ、直ニ「ワシントン」府え罷越シ、彼外務卿「ハミルトンフィーン」面會、右御達書等受取、同(明治二〔1869〕年)十二月初メ(十二月六日)「アナポリス」入校仕、凡十八ヶ月程(明治四〔1871〕年五月まで)星学(天文学)相学居候内に、帰朝可仕旨御達有之候ニ付キ、一旦奉命、明治四(1871)未冬歸着仕(後略)

この書翰や「伊勢佐太郎履歴」から、佐太郎(左平太)らの「アナポリス海軍学校」の便宜を計ったのは「外国省知事伊達中納言」(伊達宗城)であった。当時滞米中の日本留学生は「僅ニ九人」であり、そのうちから「都合次第「アナポリス」入校」が可能ということであった。その手続きには「越藩日下部太郎(八木八十八)と私(左平太)」が、ワシントン政府に出向き、そこで外務卿「ハミルトンフィーン」と面會して、メリーランド州にある「アナポリス海軍学校」入学の許可証等を受取った。

その時、外務卿「ハミルトンフィーン」が「最早今年は海軍所(アナポリス海軍学校)相始まり居り候事にて、米国の人には決して免許すること相成らず候得共、私共には日本政府より御頼みの事、慥(たしか)に米国公使より申し来り候事故、何時にても入学差し支えず、免許致すべくとて、直ちに水軍(海軍)大惣督より免許状(入学許可証)を与え」られたと語った。

薩生松村淳蔵(薩摩藩第二次米国留学生で、米国海軍士官学校アナポリスの日本人留学生卒業第一号)と私(左平太)の二人が、一八六九(明治二)年十二月六日に「アナポリス」(アナポリス海軍学校)に入校できるようになった。

前号の㉓ A148「沼川三郎(横井大平の変名)書翰」では、「来年(一八七〇〔明治三〕年)五月より弥よ御入校(「アナポリス海軍学校」入校)に相成り候御様子」と記していたが、一八六九(明治二)年十二月六日には、すでに「アナポリス海軍学校」への入学手続きが完了していた。おそらく正式な

入学は「来年(一八七〇〔明治三〕年)五月」からと誤解していた向きがある。

しかし後述するように、毎年の「アナポリス海軍学校」の開業期間(授業・座学)は、西暦十月一日より翌年五月二十日までであり、六月初めには「軍艦」に乗って「欧羅巴」(ヨーロッパ)諸州までの航海を実施し、英仏の海軍校に至る。第九月下旬には再び学校に帰ってくる。

其の間(六月から九月下旬までの4カ月間)に航海の現実(実地訓練)を教え込むとあり、三郎(大平)は航海訓練の開始を「来年(一八七〇〔明治三〕年)五月より弥よ御入校(「アナポリス海軍学校」入校)」と勘違いしていた可能性がある。

また前掲の外務卿「ハミルトンフィーン」が「アナポリス海軍学校」入学は十月一日であるが、2ヶ月以上遅れた十二月六日の入学を「日本人への特別許可」とし、その上で「アナポリス海軍学校」の規定通りに十月一日からの入学として認めたものと思われる。

「アナポリス海軍学校」の規定では、正式入学は十月一日であり、伊勢佐太郎(左平太)らは十二月六日からの中途入学であったが、「アナポリス海軍学校」に正式入学者同様、十月一日からの在籍扱いにしていたことから、前の「我明治二年十二月二十三日」で、左平太は「漸く二ヶ月程」(実際は在学17日間)云々と書いたと思われるが如何。

⑥海軍学校(アナポリス海軍学校)の様子

早速十二月六日から海軍所へ入学することができたので、「海軍学校」(アナポリス海軍学校)の様子を「荒増」(あらまし)言上したいとし、その実つぎのように詳細な「海軍学校」(アナポリス海軍学校)の様子 of 報知に、左平太自身の喜びとある種の誇りが感じられる。

・海軍第一・第二惣裁の親切

海軍第一惣裁は「コムモドル」(官名)、第二惣裁は「甲必丹」(カピタン)という。彼等は「至って深切」(親切)で、私共が「日本政府より送られし」という理由で、余(ほか)の諸生よりは「格別厚き取り扱い」をしてくれている。

彼は「何にても彼等及ぶ丈(だ)けは助力すべき候間、必ず遠慮なく告ぐべし」と言い、海軍生に於ても「別して深切」であった。さらに「私共學術に於て六ヶ敷事之れ有り候得ば、何にても尋問すべし、悦んで助力すべし」と言ってくれた。こんな次第で「私共に於ては大幸の至り」である。

一八六九(明治二)年十二月六日に入学した佐太郎(左平太)らに対して、「来年(明治三年)五月までの半年間、「ア

ナポリス海軍学校」では「惣裁」をはじめ「海軍生」らも日本人入学生に対し、非常に丁寧に対応していたことがわかる。その上前述した「第二の惣裁」は、先年（嘉永六〔1853〕年）に「ヘルリ」（ペリー）が初めて日本へ来船の時の「船将」（軍艦の指揮官）であった。

・「海軍所」（アナポリス海軍学校）の10学課目

海軍所では10学課に分れ、そのすべての教科目を列記している。

第一、海軍 海上砲術・陸上大砲運用・航海術・陸兵訓練

第二、数学 数学・代数・三角術・測量術

第三、器械学

第四、天文学及地理学

第五、窮理学（西洋物理学）及び分理学（西洋化学か）

第六、仏学（仏蘭西、フランス）

第七、スเปนヤ学（スパンヤ＝スペイン・イスパニア）

第八、鑛石学（鉱物学か）

第九、図引学（製図学か）

第十、築城学（陣地構築学か）

・指導教官（大教授・助教）と海軍生の仕事

上記の「海軍訓練」と「運用等稽古」のために「軍艦六艘」がこの学校に所属、10学課ごとに一人宛の「大教授」を配し、「助教」の人数は其の科によって異同がある。「助教」たちは「書生」（海軍生）を教導するが、「一七日」（一週間）毎に其の「大教授」に「書生」たちの「学問の甲乙」（教科成績）を報告する。当時（現在）海軍生は253人、「書生」たちを「四等」に分別、第一等は67人、第二等は56人、第三等は38人、第四等は92人である。

この第一等の「書生」の内より一人、「ルーテナント」（海軍士官を言う）一人を、毎日交代で「書生」の事（監視・監督・世話など）に関係する。此の両人の詰所は「書生」部屋の脇にあり。同じく第四等の「書生」から三人ずつ交代で、書生部屋を守備する。

・海軍生の日課

一日の日課は、朝六時に大砲をうち、此の砲声にて「書生」は床を離れる。直に寝床を作り（寝床の整理）、掃除をすることから始まる。七時に太鼓を鳴らし、「書生」は皆学校の前に並び立つ。これらの「書生」の事（監視・監督・世話など）に関係する第一等の書生一人と「ルーテナント」（海軍士官）一人が来て、此の日の学課を言い渡す。

夫より食事（朝食）を取り、終りて各部屋に帰る。八時よ

り十二時迄で「伝習」（授業・座学）の時なり。一時の太鼓に、又食事（昼食）を取る。又二時より四時までの間は「伝習」（授業・座学）の時なり。

夫より五時までの間は、「運用大砲」等の調練があり、五時には又太鼓をならして、何も食事（夕食）となる。夫より七時までの間は休息（自由時間）となるが、又七時半より九時半までの間は「勉学」（自習）の時である。同時に又大砲をならし、此の砲声にて、書生は「勉学」（自習）を止める。十時に「ルーテナント」一人来て灯を消し、直に就床する。

・「二人部屋」制と「勉学」監視

右「海軍生」には二人一部屋であり、「勉学」（自習）の時は決してお互い部屋を行き来することは許されない。若し抛無（よんどころな）くして部屋を出る時は、書生部屋の入口にいて守衛する「海軍生」の免許を得て出ることになる。彼の「ルーテナント」（海軍士官）一人と第一等の「書生」一人が、「勉学」（自習）の時は「書生」の部屋を見て廻る。若し怠るものがいたら、夕方の五時より六時までの一時間、罰として訓練場で「小銃」を持たせる（捧げ銃か）。

・「外出・喫煙・飲酒」の禁止と罰則

「海軍生」等は「海軍校」（アナポリス海軍学校）から決して外出することを許されない。若し抛無き用事があつて、門外へ出る時は、第二の惣裁のところに行き、何時から何時まで外出したいとの免許を請い、夫より又「書生」の事に関する「ルーテナント」に、右の趣を告げ、漸く出ることがきる。

「海軍生」は「煙草」を吞むことや「酒」を吞むことは特別に制禁している。若しも過つて此の法を破る者は、直に学校を追い出す（放校処分）。「書生」は四年間で学校卒業の「免許」（資格）を得る。四年の間に第二等の「書生」に対して、二年目に三十日間、家に帰ることを許した。

・軍艦航海訓練

毎年の「海軍学校」の開業は、西暦十月一日より翌年五月二十日までであり、それから六月初めに「軍艦」に乗って「欧羅巴」（ヨーロッパ）諸州まで航海を実施し、英仏の海軍校に至る。第九月下旬に再び学校に帰ってくる。其の間に航海の現実（訓練）を教え込む。

・海軍学校の構内規模と厳しい規則

実に海軍学校の「広大」であり、その上「全備」されていることは驚愕すべきことである。校則も中々「厳重」であり、特に「外国人」である自分たちにとっては「余程の難事」である。私共が入学して以来、「漸く二ヶ月程」（実質17日）にな

るが、未だに「学校の規則」も十分覚えられず、唯毎日毎日「規則」に縛られた月日を送っている。

⑦「海軍学校」での「大吉日」(キリスト誕生日)の催し

○去る(西暦1869年)十二月二十五日は耶蘇生日(キリスト誕生日)であり、西洋各国では「大吉日」と唱え、「万民大に樂を尽す日」である。「アナポリス海軍学校」でも「同断」(同様)であり、二十五日の夜は「ルーテナント」(海軍士官)及び「書生」(海軍生)等は「異風」に出で立ち(普段と異なった恰好)、「剣舞台」(演武場)上で「躍」(躍動)する。

其の「形容」(姿恰好)は、昔の欧羅巴(ヨーロッパ)での「ナイト」(騎士)と言う人物の姿をしている者もあり、又は「ペルシャ」「トルコ」「スコットランド」「印度」「支那」の人に扮装している。「古今万国の真似をなし、全く四海(世界)中の人が集合せし有様」を呈している。

其の外に十三・四歳より十八・九歳までの少女が百人余り、是れも同様に甚だ美なる粧おい(美粧)をし、其の着物は「天の羽衣」の装いである。其の美麗なことは、実に目を驚かすばかりである。所謂昔の「武礼講」(ママ、無礼講)と言うのも、此の如くかと思われる。

これらの男女は、初めは皆「仮面」をかぶり、音楽を奏して、一処(まゝ、一緒)に踊りを成す(仮面舞踏会)。凡そ二時間ばかりで、各仮面を取る。其の始めて「何某」(誰か)を知る。此の夜は各の曉まで、此の様に楽しむ。

尤も此の夜は「コムモトル」(官名)、「甲必丹」(カピタン、キャプテン)、其の外皆な爰に集まる。「水師提督」(海軍提督)等も、「ワシントン」より見物のためにやってくる。此の如く奇なる楽しみは、洋行してから初めて見た。此のように男女が集合して、「共に樂を尽す」と雖も、「風俗実(じつ)に正しく、所謂楽しんで淫(よ)らならざるなり」と感動しながら記している。

⑧林(玄助、正明)・津田(亀太郎、静一)二人の米国留学の勧め

津田・林は二人とも「全体」(もともと)「御地」(肥後藩)出立の時分は、「英行」(英国留学)の存念であったとか。然る処「当国」(アメリカ合衆国)に到着して、段々爰の地の「アナポリス海軍学校」等の事情を実見して、「当国」にて留学致し度いと相談を受けたので、私としては「至極同意」している。

未だ二人共格別英語もわかっていないので、是れより

遙々英国の様に渡海するよりも、寧ろ「当国」にて暫しの間「留学」した方が「然るべきか」と愚考している。

尤も「薩生」(薩摩藩留学生)等には、最初は「ロンドン」に留学していたが、「当時」(現今)は何れも「当地」(アメリカ合衆国)の方に「転学」している。「入費」(留学費用)も英国よりは「当国」の方が「勘弁」(やりくり如何で、生活しやすいの意か)と言っている。

前の二人が、「新約克」(ニューヨーク)着車の時分は折悪くして、私には「当学校」(アナポリス海軍学校)に来ていたので、「彼是不都合」であつた(直接迎えられなかった)。

しかしながら「ニューフロンズウィッキ」(ニューブランズウィック)には、数多の日本生が居るので、直に彼等が同所迄迎いに行き、二人を「ニューフロンズウィッキ」の方に同道して「周旋」(案内)したと聞いている。

当時「同所の学校」(アナポリス海軍学校)では、「佐土原世子」(島津政之進)等と一緒に勉学を始め、私としても「喜悅」である。何卒「成業」(学業の成就)されるよう、そののみ祈念している。

「ニューフロンズウィッキ」は、「私先の場所」(私たちが最初に落着いた場所の意か)であり、学校先生等も大に人物好き、頻りと日本生を「誘い」(勧誘)している。「新約克」(ニューヨーク)から「僅か三十里」(30哩、約48.3km)しか離れていないので、「至極弁利なる地」である。

⑨「洋行」(海外留学)への苦言

林(玄助)氏から聞いたが、「御子息様方」(下津休也の子末彦〔下津休也の五男末喜、後に安場保和の養子、安場末喜〕と元田八右衛門の子謙吉〔まゝ、健吉 1857年12月2日生まれ、当時14歳〕も「追々御洋行の御存念の由」、誠に「感銘の至り」である。何卒「御渡海」(留学)される様に、私も祈願している。

ところで私が「洋行」について聊か愚考していることがある。全体として我が国では四・五年(慶応元〔1865〕～二〔1866〕年)前より「洋行」が盛んになった後、「諸藩より欧羅巴及び当国へ渡海」する者が、殆ど百余人にもなったけれども、「未だ一人も成業(学業成就・卒業)して帰朝する者」がいない。「唯だ無止〔ムヤミ〕に洋地を奔走し、莫大の入費を成すのみ」で、「目的の学業を成さずして、多く国に帰り、誠に残念の至り」と厳しい。

つまり「我が国の人、未だ洋地の事情にうとく、唯だ誰にても、西洋にさえ渡海致」せば「速かに学業成就するもの」

と考えているので、此の如く「無益の洋行」になってしまっていると苦言と批判を呈している。

⑩晩学の悩みと苦痛、年少者との交代願望

第一私は衆に先んじ「洋行」を実現し、殊に此の「海軍校」(アナポリス海軍学校)に在学しているが、「最早我が晩学・不才にては、とても充分西洋技芸の学科を、学び成すこと能わず」の状況にある。「尤も海軍の事情は、聊か積年来の志願」であったので、「能わず及ばずながらも、日夜苦心」しているが、「私に於いては少しく難事」である。

「西洋の技術」を学ぶには「幼年の人」でなければ実現できないとの思いに至っている。何卒此の上は、私は「壮年の俊才に代り度く」考えている。「御国」(肥後藩)よりも「幼年の人物」を選出される様、何分「周旋」を「懇願」したい。

「先年以來日本より渡海致し候人、多くは二十歳以上の人にて、進歩すること甚だ遅し」という状況である。たまたま「学校」(アナポリス海軍学校)に入り、英語を学んでも、すぐに「慷慨(愁嘆)の心」を起してしまっている。

その上「学校の規則にも従えず」、遙々日本から遠洋を渡り来たものの、このように「三尺の童子」(子供)と共に「国語」(英語)等を学ぶような状況であれば、「何れの日あって、學業を成し、國家に報恩の時来るならん」かと考えてしまう。

「言語も叶わずして、或は海陸軍の學校に入らん事を望み、或は政事の學課を學ばんとして、終に首尾貫徹すること能わず、洋人の笑いを受ること又不些少(些か少なからず。極めて多い)」と慙愧(恥じ入ること)すること頻りである。さらに「とても我れ慷慨激烈の士にては、西洋の學問をなすことは六ヶ敷、御一笑成り下さるべく」と記すなど、洋學修得には不向きと、左平太は自虐的でもある。

重ねて「若し洋行生御出し成られ候節は、十五六才にして文才ある、至って静かなる性質の人物を、御選り御出成られ候得ば、後日國家の御用に相立ち申す」と、適任者の条件を記す。さらにただ「尤も当地海軍の學校などは、十四より十八までの内なくては入れ申さず」と年齢制限があることも注記している。

⑪欧米事情の讃美と日本の現状批判

方今(現在)西洋諸州は至って異無く(平穩)、只「スペイン」の一国では、先年来の内乱が続き、今も治っていない。これは1868年の「スペイン王位継承問題」のことであろう。

当時女王イザベル二世が廃位され、フランスへ亡命すると、ホーエンツォレルン家(ドイツの王家)の傍系が後継者に選ばれた。翌1869年にはスペイン東部諸都市で共和主義者が蜂起、またこの後継問題に関して、フランス世論の猛反対もあって、70年には辞退している。

その後スペイン新国王の選出問題をめぐって、1870年7月にプロイセン(プロシア)とフランスの両国は「普仏戦争」を起こした。その結果は、プロイセンの首相ビスマルクが圧勝し、フランスのナポレオン3世はセダンでの敗北で退位をさせられている。1871年にはビスマルクがドイツの統一を達成、ドイツ帝国の成立の契機となった。

其の他は先ず静謐、別して当の「アメリカ」は平和であり、尤も当時の「大統領」(グラント18代米大統領、共和党、在職1869~1877年)には国民も大に服し、益す盛大に向かっていると記す。

実に西洋諸州は「器械の術」を発明し、「弁利」(便利)を極むことは「日新の勢い」であり、「富国強兵」の一途に至っては、更に敬服する次第である。恐らくは「聖人」が再び現れたとしても「間然」(非難すべき欠点)にはならないだろう。

然し「風俗」は、又々「大に悪くむべきの風習」もあるけれども、方今の我が国体に比すると、「至極の治平、万民も安じ、富国強兵相整い」など、日本人は「一事にしても」(どれ一つとっても)及ばず、「実に洋人に対し、恥ずべきの至り」であると言い切っている。

⑫「井蛙」の日本指導者、西洋学の短所

さらに左平太は、何卒我国の「貴族」等も「井蛙の小見識」を見破り、海外へ乗り出し、洋地の事情を実見されることを希望している。ただ海外諸国にも至らぬ点はある。「西洋」は上述したように「富国強兵」の面では「盛大」になっているが、所謂「法律の学道」(法律一辺倒)からであり、「心術上の一途」には「大に暗く」、その上「道の一事(堯舜・孔子之道)に帰せざる」ことには慨嘆している。

色々尊慮を得たいことは「山岳」(山ほど)あるが、何分前文の通り、「当學校(アナポリス海軍學校)」に入ったものの、「規則」に縛せられ、更に「學問を得」ること(修學)ができず、甚だ困窮している状況にある。ただ「安否」を伺いたくして書翰を呈した。余は後便で、恐惶頓首。

二白では、「時下折角御自養御專一」、「早卒」(まゝ、倉卒・草卒、慌てるさま)かつ「乱筆」なので「推覧」のほどを託びで締め括っている。再拜。

おわりにかえて

今回取り上げたのは、明治二（1869）年和暦十二月二十二・三日の元田八右衛門（永孚）・下津休也宛の「横井左平太書翰」二通で、両書翰の日付が続いているばかりか、内容的にも関連しているので、一挙に取上げ、掲載・解説せざるを得なかった。

追加①「津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰」（和暦十二月二十日、元田八右衛門〔永孚〕宛）では、左平太・大平が住んでいた「ニューブランズウィック」（New Brunswick）は、数多の日本人留学生の居住地であり、そこに集う各藩からの留学生24人、またイギリスやプロシア・オランダなど21人、都合45人の名前を列記・把握していた。

左平太は「ニューブランズウィック」在住の最古参の留学生として、各藩からの留学生まで確実に掌握かつ世話していた。その「ニューブランズウィック」に、津田亀太郎・林玄助が訪ねてきた。左平太は「アナポリス海軍学校」在学が許可されたばかりであった。

津田・林の二人は最初「英国渡海の存念」があったが、左平太に相談の結果、一兩年の「米国留学」を決意したことを報告、また元田八左衛門の次男で、まだ年少の謙吉（まま、健吉 1857年12月2日生まれ）や下津末彦（下津休也の五男の下津末喜、後に安場保和の養子安場末喜）や沢村大助（沢村尉左衛門の息子か）やその他「見込の人物」（留学該当者）の留学の必要性を説き、留学手続きの方法までを具体的に指導、留学は兎に角「百聞に如かず」と積極的に勧めている。

そして留学による「百端の科業」（万端の課業）は、一人で出来るものではなく、各人の「天稟」（てんぴん、生まれつきの才能）を活用した「分科」によって、初めて「成業目的」（学業や事業の目的）は達成できると強調、さらに「洋学」は、その学問の範囲が甚だ広く多いので、「幼年間より取り興し」、「記憶（憶）の力」が盛んな時期にこそ「真の成業」の可能性があると、幼年からの勉学の重要性を指摘していた。

追加②「伊勢佐太郎書翰」（十二月二十三日、下津休也・元田八右衛門宛）では、この書翰の後付けの「西洋一千八百七十一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日」についての考察を試み、その結果は佐太郎（左平太）の記した「西洋一八七一年」は「西洋一八七〇年」の間違いであることを指摘、一体なぜ間違えたのか、その背景を

言及してみた。

この書翰の冒頭にある「合衆国アナポリス海軍学校より、謹んで一書拝呈奉り候」から、念願の「アナポリス海軍学校」に入学できたこと、入学してから「漸く二ヶ月程」（実際は17日間）の左平太の詳細な「アナポリス海軍学校」の学課程や学内生活の詳細な紹介と説明にそのまま現われていた。

特に佐太郎（左平太）・大平兄弟の密航渡米の最大の目的は「アナポリス海軍学校」入学であったが、弟大平は肺患で断念して帰国、兄左平太のみが奇しくも実現、まさに夢のような状況を体験できた晴れがましさと弟大平のいない口惜しさなども重要な一要因であった。

しかしその「アナポリス海軍学校」在籍後の左平太は、喜んでばかりいられない要因もあった。左平太がこの書翰の後半で「晩学の悩みと苦痛、年少者との交代願望」を細々書き綴っている。改めてそのいくつかの文言を拾っておきたい。

- ・「海軍校」（アナポリス海軍学校）に在学しているものの、「最早我が晩学・不才にては、とても充分西洋芸芸の学科を、学び成すこと能わず」の状況にあり、「積年来の志願」ではあったとは言え、「私に於いては少しく難事」であると吐露。「西洋の技術」即ち「洋学」を学ぶには「幼年の人ならずしては行れ申さず」、また「壮年の俊才に代り度く」との思いを正直に語っている。
- ・「学校」（アナポリス海軍学校）に入り、英語を学んでも、直ちに「慷慨（愁い嘆く）の心」を起してしまい、その上「遙々日本から遠洋を渡り来たもの」が、アメリカの「三尺の童子」（子供）と共に「国語」（英語）等を学ぶ状況にあっては、「何れの日あって、学業を成し、国家に報恩の時来る」ことになるのかと考えて込んでしまっている。
- ・「言語も叶わずして、或は海陸軍の学校に入らん事を望み、或は政事の学課を学ばんとして、終に首尾貫徹すること能わず、洋人の笑いを受ること又不些少」に置かれた状況でいる上、自分のような「慷慨激烈の士（愁嘆の心が極めて烈しい者）にては、西洋の学問をなすことは六ヶ敷く、「御一笑成り下さるべく」と認めるまでに追い詰められ、「十五六才にして文才ある、至って静かなる性質の人物」の方が「後日国家の御用に相立ち申す」と真剣に考えている。

この佐太郎（左平太）のこれらの文言は余りにも自虐的で尋常ではない。そこからは少しでも早く「アナポリス海軍学

校」の厳しい現状から脱出したいとの思いが、言葉を重ねるごとに増幅しているようにも受け取れる。この思いは、おそらく弟大平も同じであり、その悔しい思いが「熊本洋学校」開校の契機となったのは周知の通りである。

以上のように、一層弱気になっていた左平太は、肥後藩からの津田亀太郎・林玄助との出会いによって、この逃避的心情と同時に望郷の念がさらに募り、少しでも早く帰国したいという思いが、無意識の内に「西洋一八七〇年」を「西洋一八七一年」と書いてしまい、しかも佐太郎（左平太）自身はそのことに気づかなかったのではないかというのが、深層心理学的には真実に近いかもしれない。如何。

参考文献（本号分）

- 山崎正董編著『横井小楠』伝記編・遺稿編（明治書院、1938年）
帝国書院編集部編『地歴高等地図』——現代世界とその歴史的
背景（帝国書院、2017年）
沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』（近代日本史料選書
14、山川出版社、1985年）所収の四八「横井左平太書翰」
元田竹彦・海後宗臣編『元田永孚文書』第一巻「還暦之記」（元田
文書研究会、1969年）
田中啓介編『熊本英学史』（本邦書籍、1985年）
西忠温著「横井左平太・大平のアメリカ留学—ラトガース大学
での現地調査から—」（総合文化誌「KUMAMOTO」第30
号、2020年3月、「特集・横井小楠をめぐる人々」）
拙編「横井小楠書簡要録」（私家版、1986年）
拙編「横井小楠同志・門人一覧」（私家版、2011年）
拙著「横井小楠と二甥左平太・大平の書翰を読む」全32回（熊
本近代史研究会『近研会報』所収「くまもと近代史譚」2016
年1月～2018年9月）

Letters written by *Saheita*, Yokoi Tamako's husband, and his younger brother *Daihei* before and after their stay in the United States (7) :from the archive of the family *Yokoi* in the Kumamoto University

TSUTSUMI Katsuhiko

The two Yokoi Saheita（横井左平太）letters were found in the Motoda Eifu Relation Books（元田永孚関係文書），with which many researchers made use of them to write about his American life. However, these researchers have not written about his wavering mind from the perspective and depth of psychology.

Saheita was the oldest foreign student who had lived in New Brunswick in America. He named and introduced 45 foreign students from numerous Hans in Japan of whom 21 were located in America, 18 in England, and others.

Perhaps he wanted to say that Higo han's foreign students were too few to compare with those from other hans. He had joined Annapolis naval academy and could, therefore, speak about academic life concretely and in detail—for instance, on details concerning the curriculum of many lessons, the life in boardinghouse, events, and so on.

Saheita took care of foreign students in New Brunswick who hailed from other hans and would promise to tend Higo han's foreign-based students in the future with the belief that "Seeing is believing." He persuaded others to study abroad and also gave advice about how to go overseas to America..

Saheita emphasized that it was possible to master all subjects taught abroad by gathering innate talent of each student depending on their specialties. Furthermore, he stated that it was necessary to start studying as young as possible to master western wisdom.

Through his experience attending the Annapolis naval academy, he realized that English was the most important aspect for a master of western wisdom. Saheita expressed his discontent of not being able to master many lessons due to the lack of language skill, and showed great disappointment. He lined up eligible candidates as those who 1) had been studying since their infancy, 2) had the ability to communicate and write in English, and 3) had literary talent with cool head, being at the age of 15 or 16.

Saheita applied to enter the Annapolis naval academy after long-standing efforts, but was aggrieved because he found difficulty in studying at this institution. He desperately wanted to be replaced by younger men. He gradually lost his confidence and strongly wished to escape as soon as possible.

Saheita experienced extreme mental weakness and had hoped to return to Japan early; therefore, he had made the mistake of writing 1870 as 1871 and did not even notice this error. I think this is a sign that he was struggling deeply.